

Title	「夢殿」
Sub Title	
Author	浅子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.1 (1931. 3) ,p.154- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0155">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0155</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

長谷川角川は天文十年正月肥前國長崎に生れ、元祿元年（永祿元年の誤なるは勿論）十八歳にして父左近の志を襲いで家を出で云々

の如きはその最も甚しきものである。出版者の良心、否著者の名譽のために再版の訂正を待つ。（四六判本文百四十四頁、定價壹圓貳拾錢）（淺子勝二郎）

### 雜誌「史潮」の發刊

從來の「史學」「史學雜誌」「史學研究」「史林」「史苑」「史淵」「國史學」「經濟史研究」に加へて、今度東京文理科大學史學研究室を中心とする大塚史學會から「史潮」が發刊されるやうになつた。本誌は研究、書評及紹介、彙報の三欄に分たれ、研究欄には中山久四郎（清朝考證の學風と近世日本）、齋藤斐章（時代の背景を異にせるピスマルクとストレーゼマン）、有高巖（支那に於ける地方自治の由來）、松本信廣（笑ひの祭儀と神話）、松本彦次郎（日本近世文藝復興期の序論）、中川一男（フランスに於ける經濟社會史の發達）の諸氏が執筆されてゐる。又彙報欄は、史學界潮流、史學界近事、學内消息を含み、書評及紹介欄を合せて五十頁、あらゆる方面から斯學會の近況を報告するに多大の苦心が拂はれてゐる。本欄はやがて本誌の特徴の一つともなるであらう。吾人は本誌の健全なる發達を祈ると共に、相提携して斯學の進歩のために力めなければならぬ。

因て本誌は半三回の發行、會費は貳圓と置く。（淺子勝二郎）

### 「夢殿」

これは美術と信仰誌と題して、（本誌はその第一冊）佐伯啓造氏に依て法隆寺鷦鷯社から發行される雜誌である。今左にその内容の簡單なる紹介を試みることをする。

先づ、谷本富氏は「夢殿と日本佛教」と題して、法隆寺の夢殿は一面聖德太子の三經義疏御製作の本據ともいふべきところであり、一面太子が入定觀念乃至稱名に依て、早くもそこに他日淨土門興隆の種子を蒔かれたところだともいへるさし、佐伯良謙師は

「夢殿と聖德太子」と題して、  
太子の夢殿人定は、佛典研究が中心であり、茲にその  
太代が研究せられし佛典の内容を考査し又太子が如何に之を時  
子思想の上に應用されしやと云ふことを論ずるは、實に本篇の主  
題たるのみならず、又太子思想の研究の中心たるものでなければ  
ならぬ（傍點筆者）

さし、勝鬘經及び勝鬘經義疏、維摩經及び維摩經義疏、法華經及び法華經義疏の内容を研討せられ、又橋本凝風師は「佛教教理史上より見たる太子と夢殿」に於て、太子當時の支那六朝の佛教は朝鮮半島を経て我國に傳へられたものであるさし、飛鳥朝殊に推古朝を中心とした當時の佛教は少くも支那佛教として輸入されたものであるとして、太子の御信仰佛教を考察し、次に岸熊吉氏は「夢殿の建築」に於て、修補は屢々施されたやうであるが、建築の構造形式に迄變改を加へたと認められるものは、建久四年の天井新造、寛喜二年の附一重鳩居一重加増、并に文曆二年の石壇

修理まで、何れも鎌倉時代の出来事であることせむれ、内藤藤一郎氏は、「夢殿本尊救世觀世音菩薩像」に於て、何故に中古以來救世觀音、如意輪觀音の尊名が夢殿本尊に加へられるに至つたか、その事情は如何の問に答へて次の如く云つてをる。

夢殿秘佛の尊名は、古來幾變遷を経て來たのであつて、天平寶字の頃に於いては、これが太子と等身の觀世音像と稱せられてゐたのであるが、これに法華經觀世音菩薩普門品に見える觀世音菩薩三十三身應現の思想が加味されて、平安王朝に入り秘佛を以て救世觀音と稱するに至つたのである、しかるに平安王朝以後の眞言密教の盛行は、竟に南都法隆寺に眞言密教が入るに及んでこれが影響の下に、秘佛が寶珠を捧持せること、南無佛舍利の信仰と結び、これに著しく眞言密教的解釋を加味して、終に夢殿秘佛を以て如意輪觀音と稱するに至つたのである。

次は、廣瀬直彦氏の「夢殿の彫刻」であるが氏は、主なる古文献に依て現在安置の彫刻を論述し、其諸佛像、彫刻の製作方法、年代等に就て考證し、更に其平面的表現の技法と信仰精神の表現に於て特別な力説點を見出し、

製作の技法から言ふと、此像は丸彫と云ふよりはむしろ浮彫的方法を以て作られてゐる。百濟觀音や、金堂の四天王口なること、左右の天衣が前後に動いて、立體的又は彫刻的な手法になつてゐるが、此像の如きは左右に動いてゐて其表現は著しく平面的である。此事は、百濟觀音と夢殿のこの像との製作が同じ飛鳥時代であつても、其處に新舊の時の隔りを見るこゝが出来る。これは飛

鳥人の技法の幼稚のみに歸することは、烈なる信仰、其れより生れる佛像に對する大陸佛像そのまゝの表現法さう云ふ經路を通じて出來たものではないかと思考するのである。

させられてゐる。濱田青陵氏は、「夢殿の雜感」に於て、此の觀音の靈秘なる尊像たること、又美術史上の價値は別として、其の藝術上の造詣に至ては必しも大なるものではなく、金堂の三尊なごに共に、美術史上の興味に主として心惹かれることなし、

畢竟此の夢殿本尊の如きは、金屬小像を其の儘「擴大」したものに過ぎないがただ注意しなくてはならぬことは、斯の如き優秀なる裝飾意匠と、彫刻の様式とは全く相伴つてゐないこと云ふことである。六朝、飛鳥時代は即ち裝飾藝術が異常なる發達を遂げて「マチュリチー」の時代である。而して彫刻は未だ其の搖籃から漸く脱し得た「インフアンシー」の時代である。我々は此の發達の相伴はない兩藝術が此の一箇の夢殿觀音にも具體化されてゐるものなることを知らなければならぬ。但だ我々は既に發達し切つた藝術に對する賞嘆と同時に、未だ發達の道程に在つて、眞率なる態度を以つて完全なる表現に向つて努力しつゝある作品に對する大なる憧憬を禁じ得ないものである。

と述べて居られる。次に、魚澄惣五郎氏は、「夢殿の印象」に於て、極めて美しい文章で、そして感激的に夢殿本尊救世觀世音菩薩を禮讚せられ、中里介山氏は、聖德太子の三昧殿日本佛敎の根源、我國文化の發祥殿としての「夢殿の感想」を述べられ、最後に川西無相師は、

本より偉大の言行はすべて末代迄の規範たることは申すまでもなき事ながら、我が聖徳太子に於て、更に偉大なる神威を感じしめられるを覺ゆる所以のものは、即ち信仰の力による事である。菩薩としての太子の力である。吾人の最も切實に今の世に叫びたいのはそれである。實に太子の思索の源は信仰の熱誠に立脚して大悲菩薩そのまゝの終始であつた

とし、三經の一所一文を引いて、太子の所行を述べて居られる。以上で大體本誌の内容を紹介し得た心算であるが、要するに本誌はその表題の示すが如く美術と信仰誌であり、純正史學の立場よりすれば多少縁遠い憾なきを得ないし、又多少心して讀むべき所も無いではないが、然し歴史の正しき姿と生命を把握せんとするものにまつて彼等が純正なる批判と精厚なる考察と透徹せる綜合觀を以て、あらゆる人間生活の真相に觸れんとする時、本誌の如きは必ずしもその存在の理由を主張し得られないものもあるまい。

因に本誌には、以上の外に夢殿に関する和歌集、俳句集をも收めてある。(表紙法隆寺藏夢殿古版本鳥ノ子本版印刷なほ題字夢殿は法隆寺の古印)半紙版、和紙、口繪コロタイプ版二葉、挿繪五葉、菊判本文一二九頁、定價壹圓、丸善三田出張所發賣)(淺子勝二郎)

寄贈交換圖書雜誌目錄

支那に佛教と儒教道教	常盤大定著	東洋文庫
於ける		
岩倉公一行訪米始末書		兒玉省氏
抱朴集(晉唐四家詩抄)	渡邊敏夫選釋	金雞學院
金雞學院文藪第十一	安岡正篤著	金雞學院
革むる者、滅ぶる者		金雞學院
抄 醉古堂劍掃	渡邊敏夫選釋	九州民俗學會
筑豊炭坑地の習俗と方言		直良石器時代文化研究所
日本洪積世時代哺乳類化石の分布		國立中央研究院
集刊 第一本 第二分、第三分		歴史語言研究所
第二本 第一分		名古屋史談會
僧周文朝鮮外遊に就いて		備後郷土史會
備後史談 六の一二、七の一、七の二、七の三		防長史談會
防長史學 一の二		朝鮮佛教社
朝鮮佛教 八〇號、八一號、八二號		江戸文學研究所
江戸文學研究 二の一二、三の一		風俗研究會
風俗研究 一二八號、一二九號、一三〇號		東西文化社
福岡 四六號、四七號		臺北國語國文學會
言語と文學 第四輯		
言語と文學 第四輯、第五輯		
現代佛教 七の七八、七の七九		